被召湯山御湯云々、

〔百練抄十七後深草〕建長七年八月十日甲戌、上皇〇後嵯峨御幸伏見殿、御傳領之後初度也、

〔増鏡十老の涙〕やよひのすゑつかた、〇弘安二年持明院殿の花ざかりに、新院〇亀山わたり給ふ、鞠のかゝり御らんせんとなりければ、御まへの花は、木ずゑも庭もさかりなるに、よそのさくらをさへめして、ちらしそへられたり、いとふかうつもりたる花の雪、あとつけがたうみゆ、上達部殿上人いとおほくまゐりあつまり、御隨身北面の下蔀など、いみじうきらめきてさふらひあへり、わざとならぬ袖ぐちどもおしいだされて、心ことに引つくろはる、寢殿の母屋に、御まし對座にまうけられたるを、新院いらせ給ひて、故院〇後嵯峨の御時さだめおかれしうへは、いまさらにやはとて、長押の下へひきさげさせ給ふほどに、本院〇後深草いで給て、朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに、けふの御幸には、御座をおろさるゝ、いとことやうに侍りなど聞え給ほどいと面白し、むべ〳〵しき御物語はすこしにて、花の興にうつりぬ、御かはらけなどよきほどのゝち、春宮ふしみ殿おはしまして、かゝりの下にみなたちいで給、兩院春宮たゝせ給ふ、中半すぐる程に、まらうどの院のぼり給て、御ゑたうづなどなほさるゝほどに、女房別當君、又上らうだつ久我の大おとゞ〇源通光のむまごとかや、かばざくらの七くれなゐのうちぎぬ、山吹のうはぎ、あか色のから衣、すゞしのはかまにて、ゑろがねの御つき、柳筥にすゑて、おなじひさげにて、柿びたしまゐらすれば、はかなき御たはぶれなどの給ふ、くれかゝるほど風すこしうち吹て、花もみだりがはしくちりまがふに、御鞠數おほくあがる、人々の心ちいとえむ也、ゆゑある木陰に、たちやすらひ給へる院の御かたち、いときよらにめでたし、春宮もいとわかうつくしげにて、こきむらさきのうきおり物の御指貫、なよびかにけしきばかりひきあげたまへれば、花のいとゑろくちりかゝりて、もんのやうに見えたるもをかし、御らんじあげて、一枝おしをり給へるほど、繪にかゝ